

田舎にいても噂は聞こえてくる。終戦になって疎開していた人々がぼつりぼつりと町に帰って来ているのを耳にした。

母は一大決心をし、また荷車に看板と少しの荷物を載せ、実家から借りたお金を持って徳平と共に夕焼け通り商店街に向かったのだった。

徳平と栄治は再会し、二人は笑って、泣いて抱き合っ
て喜んだ。

母は焼け跡に最初はバラックのような小屋を建て、そこで八百屋の商売を始めた。しばらく辛抱したら出兵した夫が戻って来るかもしれない、その時に商売の土台を少しでも築いていたら夫がどんなに助かることだろう、とはかない望みを繋いでいた。

店の裏の畑で野菜を作り、足りない時は青物市場でと見合いをして、同時期に結婚し、子どもにも恵まれた。

商売で寝る間もないほど忙しい時期が続ぎ、徳平は懸命に働いた。

「へい、らっしやーい。今日はほうれん草が新鮮で安いで。あ、バナナを一本？ 奥さん、明日は坊ちゃんも遠足やろ。今日はバナナが一本ずつよく出るけんのに」
よく通る声は休む間もなかったものだし、張り切っていた。天井から吊るしているつり銭用のカゴが上がつたり下がったりと大活躍だ。夏にはこれまた天井から吊るしてある何本もの蠅取り紙には蠅がびっしり貼り付いていたものだった。

夕方が過ぎるとほとんどの商品は売り切れ、明日、市場で仕入れるモノの算段をしたものだ。妻と共に商

買ってきて売った。そのようにして夫の帰りを待ったが、何年たつても夫は戻って来なかった。夕焼け通り商店街で出兵していった男たちは誰一人として帰って来なかった。

そのうちに八百屋の徳平と栄治は一人前に働ける年になった。そうなると徳平の母は緊張の糸が切れたように病気で寝込むことが重なり、徳平が成人して間もなくすると、細々と燃え続けていた命の炎が燃え尽きて亡くなった。

戦後は徳平や栄治だけではなく、夕焼け通り商店街の人々は苦勞に苦勞を重ねて店を再興した。そのうちに景気はよくなり、小さな商店街が客であふれることもあった。

徳平と栄治は商店街の組合長から紹介された娘

い、ケンカをする暇もないほど、まったく眼が回るくらい忙しかった。

あの頃は商売がおもしろくてしかたがなかった。しかし悔やまれることは、店ばかりを優先させて、一人息子の清をろくろくかまってやらなかったことだ。

いつの頃からか父と息子は全く心が通わなくなり、お互いが何を考えているかさえわからなかったし、またわかるうとする努力も怠った。

もちろん忙しい合間に徳平夫婦は清に声をかけたこともあった。しかし清は面倒くさそうに返事をするだけで、会話の芽は育たなかった。

清はこつこつと努力することを嫌い、学校では悪ふざけばかりする子だった。学校から何度も息子のことで呼び出しがあったが、商売に忙殺されていた徳平は

すぐに忘れてしまった。「あつ、学校に呼び出されとつた」と気がついても後の祭り。先生が訪ねて来ると、「はい、すみません。よう言いかけますんで」と冷や汗を流しながら答えた。ところが、清にどう言いかけたらいのかすら思いつかなかった。

「学校ではちゃんとせないかんやないか」と言うのがせいぜいで、それに対して清は生返事をしていたが、やがては生返事すらしなくなった。

徳平夫婦が厳しく叱らないのをいいことに、清の無責任で気まぐれな性格はひどくなる一方で高校生になっても、仲間と一緒に becoming 先生に反抗したり、喫煙や早退などの問題行動は少しも改まらなかった。そして高校二年の時に、店の金をくすねてふいと家出をしたまま今に至る何十年と音沙汰がない。

家電製品の普及によって時間ができ、また教育費がかさむようになってサラリーマンの奥さん方が働き始め、近所の人たちでさえ仕事帰りに一度ですべてが揃うスーパーマーケットで買い物をするようになった。たまに買い忘れたものがあると八百徳に駆け込んで来る程度になってしまったのだ。

そんな日々、徳平は息子の清がいったいどこで何をしているのやら、と思わない日はなかった。生きていればもう四十を過ぎているだろう。(他人様だけには迷惑をかけてくれるなよ)と朝に広げる新聞の事件欄をはらはらしながら目を通す。しかしすべては遅すぎたのだ。一緒に暮らしていた頃のわが息子が何を思い、小学生、中学生、高校生時代をどう育っていたのかすらあまり記憶にない。

清は中学時代から度々家出をしては友達の家に入り浸って一週間位は帰って来ない時があった。だから今回の家出も、また友達のところにいるのだろうと徳平夫婦は樂觀していた。しかし、清はいつまでたつても帰って来なかった。

(これはひよつとして大変なことではないか)と遅まきながら慌てて、徳平夫婦は警察に家出人捜索願を出し、また自分たちでも極力努力して捜したが、清がどこに行ったのかはまったくかめなかった。そして皮肉なことに清が家出をしてから人々の生活の流れが変わり、八百徳の商売は傾き始め、時間がたつぷりとできたのであった。

小さな八百屋は軒並みスーパーマーケットに客を取られ始めた。

徳平が今、商店街の子どもたちを可愛がり、とくに隼人と航平を自分の孫のように思うのは清を省みなかった罪滅ぼしの意識があるのかもしれない。

商売が暇になるにつれて、徳平はかみさんに清に対する自分たちの育て方を悔やむようになった。

「わしらの子育ては失敗だったんかの。もつと清のことをかまってやったらよかつたんかの。商売の忙しさにきりぎり舞いしとつたが、それでもわしらは親やけん、商売を放りだしても、学校に呼ばれた時にちゃんと先生の話を聞きに行けばよかつたの。中学生や高校生になったらタバコを吸ったり、万引き事件を起こすようになったやろ。あん時も注意らしい注意をよせんかつた。情けないことやつたの。今になれば親として、きちんと厳しく叱つたらよかつたと思うとる。」

清がわしらとほとんど口をきかんようになった頃、『清、心配しとるんやで。おまえは何を考えとるんや』と一言でも声をかけてやったら、家出なんかせんかったかもしれん。なあ、おまえはどう思つとるんや」徳平がくどくどと何度も同じことを悔やむとかみさんはあつさりとしらうのだ。

「なんだい、今頃家出してから何年たつていると思つとるんな。何年も前のことをあれこれ言つてもしようがないやろ」

一度だけ、かみさんの言い方があまりにさばさばしているのので徳平は珍しく強い口調になったことがあった。

「おまえはそれで割り切れるんかい。わが子のことやで。』しょうがないやろ』だけで片付けられんやろ。母親

として冷たいやつちやの」

ふつと重いため息をついてかみさんは付け加えた。

「あんた、あたしが冷たいと言うけど、あたしらは精一杯やったんで。あたしらは商売を大切にして寝る間も惜しんで働いたやろ。それは清におまんまを充分に食べさせるためだったんや。あん時は』しょうがなかった』とでも考えんと生きていけん。あたしも何千回とあたしらの子育てのことを考えたで。くたびれ切つてガーガーと眠っているあんたの横で、家出した清のことを思つて、眠れん夜を何回も過ごしたんや。あたしが清の子育てのことを考えんかったとか悔やまんかったと思つとるんやったら、それは大きな勘違いや。けれど、結局あたしはもう取り返しがつかんと割り切ることにしたんや。あの忙しい時分には、あれ

以上のことはでけんかった」

かみさんはわっと泣き出して、エプロンでこしこしと涙を拭いた。

かみさんは泣き続けた。割り切つてさばさばとしているようにみえたかみさんがどんなに悩んでいたかを徳平は初めて身に沁みただった。

その時から徳平は清のことについてかみさんに愚痴を言わないようにしたのだった。

(以上2月6日放送分)